

Title	西行の四国下向：大師遺跡巡礼歌群について
Sub Title	
Author	川村, 晃生(Kawamura, Teruo)
Publisher	慶應義塾大学国文学研究室
Publication year	1983
Jtitle	三田國文 No.1 (1983. 1) ,p.1- 4
JaLC DOI	10.14991/002.19830100-0001
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00296083-19830100-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

西行の四国下向

——大師遺跡巡礼歌群について——

川村 晃生

西行の四国下向は、それを記す家集の詞書の異同によって、仁安二（一一六七）年とも同三年とも伝えられている。たとえば陽明文庫本『山家集』は仁安二年とし、『西行上人集』や宮本家本『山家心中集』等は仁安三年としているが、いずれに決すべきかの積極的論拠が発見されぬままに現在に到っている。しかしこの下向の目的については、かなり明確にされていると言える。すなわち一つは崇徳院の御陵参拝であり、もう一つは弘法大師の遺跡巡礼であった。とくに前者については、近時崇徳院怨霊説話の発生と関連づけて考える立場が有力であり、またそれは相應の説得力を持ったものと言い得るであろう。そしてこの下向の目的が、どちらかと言えば御陵参拝に傾いて論じられる嫌いがあるようにも思われる。たとえば久保田淳氏は、弘法大師の遺跡巡礼歌群（一三五六―一三七一）⁽³⁾について、旅日記的な記録的文章という窪田章一郎氏の言を引かれつつ、「確かに歌集としては異色で、或いは高野山の同行達に示すといったような目的を持った歌稿であったかもしれない。しかし作品としては特に取立てて論ずるほどのものではない」と述べるにとどめておられる。この久保田氏の、高野山の同行達云々という想定

は、後引する『南海流浪記』の記事内容などを勘案すると、その蓋然性は高いと言えそうだが、しかしそれをもふくめて、西行の僧としてのあり方を考察する際、この四国下向時における大師遺跡巡礼は少なからぬ意味を持つものと思われる。そこで小稿では、大師遺跡巡礼歌群をあらためて取上げ、それを周辺資料と突合せつつ考察してみた。

*

『山家集』一三五六番に、

同じ国に大師のおはしましける御あたりの山に、庵むすびて住みけるに、月はとあかくて、海のかたくもりなく見えければ、くもりなき山にて海の見れば島ぞ氷のたえまなりける

という一首がある。巡礼歌群の冒頭の一首であるが、詞書に言う「大師のおはしましける御あたりの山」は、『西行上人集』などに「讃岐にて善通寺の山にて」とあるから、五岳山麓の善通寺一帯を指しているであろう。そして同所に西行は庵を結んだのだが、その庵については『南海流浪記』に、

十月之比南大門ニ出テ。南方名山等眺望。南大門前ノ路。弘三丈

五尺。長八町。左右ニ率都婆多立^レ之。其門東脇ニ古大松アリ。寺僧云。昔西行此松ノ下ニ七日七夜籠居テ。

ひさに経てわが後の世をとへよ松あとしのぶべき人もなき身ぞとよめるによりて。此松ヲハ西行方松ト申也ト申ヲキ、テ(略)⁽⁶⁾

と記されている。同書は高野山僧道範が、寺内の紛争に巻き込まれて、仁治四(一二四三)年讃岐に流され、建長元(一二四九)年帰山する間の紀行で、西行の下向より七、八十年程後れるものであるが、右記事中の歌が『山家集』一三五八番に見えていることから、その内容は信頼してよいと思われる。おそらくこの南大門前の庵その他を拠点として、西行は大師の遺跡を追い、一冬を越したものと推測される。『山家集』一三六〇〜一三六六番の雪を詠んだ歌群や、一三六七番歌、

花まいらせける折しも、折敷にあられの散りけるを

しきみをく闍伽の折敷のふちなくば何にあられの玉と散らまし

などは敵しい越冬の様を物語っているが、その滞在期間中に赴いた主要な場所は、大師生誕の地(一三六九)、曼陀羅寺、行道所(一三七〇)、我拝師山、筆山(一三七一)等である。大師生誕の地は善通寺内にあり、『南海流浪記』付載の「誕生院縁起之事」には、(昔は精舎があったのだが、その礎石もなくなったので、寛元三(一二四五)年木像御影建立の時に誕生所に一堂を建てた)旨が記されているから、西行の頃にはそれを伝える遺跡は残されていなかったらしく、わずかに『山家集』同書によって松がその標に植えられていたことが知られるのみである。また曼陀羅寺は、『平安遺文』⁽⁶⁾によれば、弘法大師が帰朝後建立したもののだが、その付近には施坂御堂と称する行道所があったらしい。同じく『平安遺文』⁽⁷⁾によれば、両所

は大師入滅後かなり荒廃したらしく、康平元(一一〇五八)年に修造建立されている。したがって西行の訪れたそれら両所は、再建後のものであったことになる。この行道所が非常に峻嶒な地であったことは、『山家集』詞書や『南海流浪記』によって知れるが、現在曼陀羅寺裏の山の中腹に西行庵と称する小さな堂が残されており、もしその伝承を信ずるとすれば、前記の善通寺南大門前の庵とは別に、曼陀羅寺近くにも庵を構えて大師の行跡を偲んだことになる。

なお我拝師山は、『山家集』詞書に依れば筆山と同一の山となっており、『大日本地名辞書』にも同様な記述があるが、『全讃史』などでは別の山となっている。その他、弘法大師の御影や筆跡なども一見に及んだらしい。前者は『南海流浪記』によれば善通寺二重宝塔内に納められる大師入唐時の自筆の像であり、後者は四之門の額のこと、同じく『南海流浪記』によれば「善通之寺」と記されていた模様である。

以上見た如く、西行は善通寺を中心としてその周辺に散在する大師の遺跡の一つ一つを、自らの足で歩き目で確かめて一時期を過ぎた。それによって、西行の大師への崇敬の念がますます深まっていったことは想像に難くない。

*

ところで右のような西行の大師遺跡への並々ならぬ関心を読み取った上で、本歌群中に見られる左の如き本文の異同に注目したいと思うのである。問題となるのは、『山家集』一三五八〜九番の部分である。

いほりのまへに、まつのたてりけるをみて

ひさにへてわが後の世を問へよ松跡しのぶべき人もなき身ぞ

ここをまたわれ住み憂くてうかれなば松はひとりにならんとすら
ん

右二首は、『山家集』によれば同期の作のように読めるが、『西
行上人集』(四五七〜八)には、両首の間に、

土佐の方へやまからましと、思ひ立つ事侍りしに、

という詞書が存する。となれば右二首は別時の作ということになる
が、この異同はどう考えればよいのであろうか。すでにこの詞書に
ついて三好英二氏は、

土佐行脚が企てられたらしいが、土佐での歌らしいものは見当ら
ないので、果して土佐へ赴いたかどうか判断としない。恐らく土
佐行脚は実行しなかったであらう。

と述べておられる。また窪田章一郎氏も、三好氏の意見を引かれた
上で、

雪・霰の降る冬の寒さを庵で過していた西行が、四国での南海岸
へと居を移そうと計画したのは、考え得ることである。ただ「土
佐の方へや」と書いているところを見ると、そのように心が動い
たという旅の心境を後年歌稿整理の際に、なつかしい思い出とし
て書き加えたのではなからうか。

と述べておられ、両氏ともに西行の土佐行の意志を読み取っておら
れる。たしかに和歌の内容からすれば、土佐に下ろうとした時の歌
であると解釈した方が妥当であり、詞書は存した方がよいようであ
る。

ではその目的は何であったのだろうか。窪田氏は嚴寒の北四国か
ら南岸へ居を移そうとしたということで、その理由説明をされてい
る。しかし既述の如く、西行の善通寺周辺の行動をふまえれば、こ

の土佐下向の意志表明も、大師と何らかの点でかわっているの
はないかと考えられるのである。そこで弘法大師伝を探っていく
と、興味深い事実が発見されるのである。たとえば大師の示寂を記
す『統日本後紀』(巻四、承和二八三五年三月廿一日条)に存する卒
伝に、

攀躋阿波国大滝之嶽、觀念土佐国室戸之崎。幽谷応声、明星
来影。

という記事が見える。右は『大僧都空海伝』(藤原良房著)に材を
仰ぐものだが、同類の記事が『三教指帰』序文や『空海僧都伝』(真
濟著)その他に見えており、空海伝の中ではきわめて著名なもので
あったと言える。右の条は、空海が大学を退き仏道修業に励んだ、
比較的若い頃の記事で、不明な部分の多い空海の若令時の伝の中
は核心をなすものであった。現在土佐室戸には、最御崎寺(東寺)と
金剛頂寺(西寺)が存し、いずれも大同年間に空海の草創と伝えら
れている。したがって土佐室戸は、西行にとって空海伝の中で親し
まれていた地であり、大師ゆかりの地として意識されていたにちが
いない。しかもそこは、空海が困難な修業を積んだ所と伝えられて
いる。善通寺周辺において大師修行の跡に接した西行が、さらに足
を伸ばして四国内にあるもう一つの大師修行の跡を踏んでみたいと
思ったのは、自然の成行であったと言える。もちろん家集には西行
の土佐行を記す証はない。どちらかと言えば土佐行は、窪田氏が述
べられる如く西行が瞬時そう望んだだけで実行されなかったと考
える方が妥当であらう。しかしそのような心の動きに、西行の僧とし
ての生き方の一面を読み取る必要があるかと思われる。西行が大師
の跡を追って土佐行を望んだとすれば、この讃岐での大師遺跡巡礼

は、西行に意外に大きな影を落としたと考えられる。その意味で『西行上人集』の伝える詞書の一文は、再考に値すると思われるのである。

注

- 1 久保田淳『新古今歌人の研究』（一九七三、東京大学出版会）七二頁。目崎徳衛『西行の思想史的研究』（昭53、吉川弘文館）二二六―二三五頁。
- 2 注1既掲書、七二頁。
- 3 本文は陽明文庫本『山家集』（久保田淳編『西行全集』へ昭57、日本古典文学会）所収）による。以下同じ。
- 4 目崎氏（注1既掲書・二二六頁）も、御陵参拝に下向の目的の重大さを認められている。
- 5 本文は群書類従本による。またこの庵の記事については、『西行物語』（桑原博史氏注、講談社、昭56）その他に指摘されている。
- 6 三卷―一〇二〇（治暦三年八月廿五日）及び七卷―三二九〇（長寛二年七月廿日）等。
- 7 九卷―四六四一（延久三年八月十三日）。
- 8 『西行歌集』（下）（昭23、大日本雄弁会講談社）一三二頁。
- 9 『西行の研究』（昭36、東京堂出版部）二七五頁。